

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本の住まいでは、①風を遮断しやだんしながらも、いつでもそれを取り込めるような装置を、格子*1や襖ふすまや明障子あかりしょうじのほかにも、さまざまなデザインで実現してきた。季節によって空気の流れは、好ましいものとして楽しまれてきたのである。だから、わずかな空気の流れをも捉とらえて音に変換する装置としての風鈴ふうりんが楽しまれた。

日本の住まいにおけるしきりが、頑強に自然環境からの遮断によって人工性を主張するのでなく、自然環境を取り込むようなしきりとなったのは、日本の自然環境が人間にとってさほど厳しいものではなかったからなのかもしれない。鳥や虫の声、雨や風の音をけして排除するのではなく、むしろ好ましいと思う感覚も、そうしたしきり方と結びついているように思える。自然環境を強固に遮断することはしなかった、そうした住まいに生活したがゆえに、人間の関係つまり社会的関係性もきわめて微妙にまた曖昧にしきる意識が形成されたのではないか。そこには近代的なプライバシー意識とは異なった、他者とわたしの関係が存在した。

ものや装置によって、わたしたちの感覚や意識が形成されたのか、逆にわたしたちの感覚や意識によってものや装置のあり方が生まれたのか。それはどちらもありうる。いずれにせよ、意識によってものや装置のあり方は深くかかわっていることは否定しえない。

②ものや装置とわたしたちの感覚や意識のあり方は深くかかわっていることは否定しえない。衝立つだてや几帳きさうあるいは襖ふすまのように垂直に、つまり は、空間を切断し空気の流れを調節しました視線を遮さかるはつきりとしたしきりとして認識することができる。しかし、わたしたちの住まいには、そのようなはつきりとした空間をしきる装置としては見えないのだが、空間をしきっているものがいくつもある。そのしきりは、壁状のしきりよりもさらに文化的そして社会的しきりとして機能しているといえるだろう。(A)、板の間と畳の座敷の違いは、素材によるしきりによっている。そして、そのしきりは空間の格を差異づけている。入り口ちかくと奥の距離も同様である。

建築史家の鈴木博之さんにうかがった面白いエピソードがある。鈴木さんは、ハーバード大

学で日本の建築についての講義をし、学生たちを実習体験のためボストン美術館ミュージアムに設えられた日本の部屋に連れて行ったところ、部屋からはるかに離れた場所で靴を脱いでしまう学生や、室内に入り込んで靴を脱ぐ学生までさまざまだったというのだ。日本の住まいでは靴を脱ぐのだということを知ってはいても、ではどこが靴を脱ぐしきりになっているのか、そのしきりがわからないのである。

よく似た事態をわたしも見たことがある。一九八〇年代のはじめ、フランスの社会学者のジャン・ボードリヤールを東京に招き、連続シンポジウムを行った。シンポジウムの終わった日の夕刻、どこかで参加者がボードリヤールを囲んで食事をしたということ、わたしが新宿の豚カツ屋を予約した。この店は、奥が畳の座敷になっており、手前が椅子式になっていた。ボードリヤールを座敷に座らせ、参加者の多くは椅子についていた。時間が経ちボードリヤールが、先にホテルに帰るということで、全員で見送った。ところが、ドアを出てすぐにボードリヤールはもどって来た。靴を履かないまま道路に出てしまったのである。座敷に上がるところで靴を脱がされたことを忘れてしまったのである。

こうしたしきりは、大雑把おおざっぱに言えば、意識や感覚の面における内と外とのしきりとなつていくといえるだろう。文化的あるいは社会的なしきりが理解されていないと、この内と外のしきりが認識できないのである。

わたしたちは、物質的にも非物質的にも、さまざまな場面で内と外とをへだてる壁をつくっている。そしてその壁の外に出て行ったり再び戻って内に入ったりということを繰り返している。壁は個人や家族や集団や組織によってそれぞれ設けられている。この壁の存在によって、自己が自己として認識されている。また、時として壁の内側に他者を入れたりもする。住宅においてはその壁の内と外をつないでいる空間が玄関ということになるだろう。(B)、玄関には精神的にも物質的にも外と内を調整する空間としての意味があるといえる。今日、玄関というと、わたしたちは、ある程度、共通した形式をもった空間を想起する。しかし、ほんの少し以前まで住宅の出入り口は、玄関という形式だけにはかぎられていなかった。

いまだではなくなつてしまつたけれど、一九六〇年代に「学生村」というのがあつた。これは、どこか特定の場所にあるというのではなく、東京近郊であれば山梨県や長野県などで、夏の期間だけ、学生を受け入れる村のことをそう呼んでいた。いわば、農家が割安の宿泊施設を営業したのである。現在の「ペンション」のようなきれいな施設ではないが、経営者の住まいが宿泊施設になつていているという点では、形式としてはペンションである。その学生村の農家に一度だけ友人たちと行った経験がある。ほんの数日だけだが、比較的古い農家で生活することのできた貴重な体験だつた。

農家が都市部の住宅と決定的に異なつていたのは、日常的な出入り口の場所がふたつあつたことだ。ひとつは土間から、もうひとつは日当たりのいい南の庭に面した廊下（縁側）からである。土間のつくりは、引き戸を開けるとすぐに土間があり、ここから風呂、勝手、板の間（ダイニングに使つていた）にそれぞれ行けるようになっていたように記憶する。したがつて、玄関らしい玄関というのとはなかつた。とはいつても、現在では、出入り口の総称として「玄関」という言葉を使つていたので、こうした場所も玄関といつていいのだろう。さらにいえば、庭に面した廊下から出入りするという形式は、かつての寝殿造りの住まいが使つていた形式である。

出入り口の形式としての③「玄関」という空間は、かなり長い時間をかけて形成された日本に特有な空間のようだ。日本の玄関のような空間は欧米にはない。

（柏木博『「しきり」の文化論』講談社現代新書）

《語注》

* 1 格子 ————— 細い木などを縦横に、間をすかして組んだもの。建具として戸、窓

などに取り付ける。

* 2 几帳 ————— 昔、室内の仕切りに立てた道具。

* 3 シンポジウム ————— 質疑応答を行う形の討論会。

問一 (A) (B) にあてはまる言葉として、最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば イ だが ウ もちろん エ したがって

問二 傍線部①「風を遮断しながらも、いつでもそれを取り込めるような装置」とありますが、日本の住まいがこのように作られたのはなぜですか。本文中の言葉を用いて六十字以内で答えなさい。

問三 傍線部②「ものや装置とわたしたちの感覚や意識のあり方は深くかわっている」とありますが、ものや装置と「わたしたち」の意識とはどのように関わっていますか。最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 日本人には昔から自然をめぐる心があり、自然に囲まれることを重視する生活をしてきたため、人を愛する慈愛の精神が根付いている。

イ 日本は西洋と違って自然環境を強固に遮断することを伝統としてきたため、他者との間にも一定の壁を作って距離感を保とうとするようになった。

ウ 日本は自然をはっきりと遮断することをしなかつたため、人間関係においてもはっきりと区切らないことを好む意識が形成されてきた。

エ プライバシーを重要視する日本では、自然を曖昧にしきろうとする意識を持つ一方で、周囲の人との距離感には無頓着な一面を備えている。

問四

にあてはまる言葉として、最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 公私をわけるときのしきり

イ 自然と一体となるしきり

ウ 役割を明確にするしきり

エ 壁状になるしきり

問五

傍線部③「『玄関』という空間」とありますが、日本における玄関とはどのような空間として存在していますか。本文中から二十字で探し、初めの五字を答えなさい。

問六

次の文は、本文中のある段落の末尾にあったものです。元に戻す場合、どこが適当ですか。元に戻す箇所の直前の五字を答えなさい。(句読点も一字に数えます。)

【 したがって、日本ではこの形式はかなり古く伝統としてあったとわかっていい。 】

問七

本文の内容を説明したものととして、正しいものを全て選び、記号で答えなさい。

ア 現在の住宅は玄関と呼ばれる定型の場所を設けることはせず、自由に周りと調和しや

すい環境を大事にする考え方が広まっており、特に都市部ではその傾向が顕著である。

イ 欧米には自他をしきろうとする意識が昔から根付いており、そのため壁のような明確なしきりを設けることが社会的なしきりとして機能している。

ウ 日本人は昔から物事をはっきりとさせることを苦手とする性質を備えていたため、日本の自然環境の穏やかな環境を好ましいと感じることができた。

エ 日本にやってくる外国人が、どこで靴を脱ぐのかわからないのは、相手の文化についての不勉強が主な原因であり、今後のグローバル社会において相手を理解しようとする意識は不可欠だ。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

少年はマスターと呼ばれる肥満体型の男性からチェスを習った。みるみるうちに腕前の上達してきた少年は、ある日公園にいた男たちを相手にお金を賭けたチェスをした。その勝負に勝利し、お金を手にした少年だったが、それをマスターに知られてしまい、マスターと賭けチェスについて話し合った。

「賭けチェスをやったんだね、坊や」

賭けチェスが何を意味するのか、少年は正確に理解はしていなかったが、マスターの口調からそれが好ましくないものであり、公園で酔っ払いを相手にしたあのチェスを差しているのだということとは、すぐに分かった。

「はい」

少年は素直にうなずいた。

「で、勝ってお金をもらったのかい？」

「はい」

「そうか……」

マスターは無精髭むしひげに手をやり、ジョリジョリ音をさせながら、①長いため息をついた。怒っている気配はなかった。むしろ思案に暮れ、弱り果てているように見えた。その様子がいつそ少年を辛い気持にさせた。公園で男たちに商品券を差し出し、チェスの勝負をして以降、弟とお子様ランチを食べてもなお消えずに淀みよどみ続けているどんよりとした後ろめたさが、いよいよ気持悪く膨らんで少年の胸を押し潰つぶそうとしていた。と同時にどうしてマスターが公園での出来事を知っているのか、やっぱり弟から漏れたのか、その理由についての想像が頭を駆け巡っていた。こっそり仕掛けたつもりの手がやすやすと見破られ、たちまちチェックメイトチェックメイトされたかのような、惨めな負け方をした気分だった。

マスターは頭をかき、ベルトを引っ張り上げ、食卓に指先で何かわけの分からない模様を書

いた。シャツの襟からはみ出した首の肉をつまみ、Aシユガーポットの中のスプーンをかき回した。そうやって思いつく限りの仕事を一通りやったあと、ようやく口を開いた。

「俺は坊やがチェスでお金を稼いだことを怒っているんじゃない」

視線はシユガーポットに注がれたままだった。

「例えばグラッドマスターたちは、素晴らしいチェスを指して、そのご褒美をもらう。それは当然のことだ。盤上に映し出される絵、浮かび上がる詩、響き渡る音に観客は皆拍手喝采を送り、自分たちの感動の何分の一かでも形にしてプレゼントしたいと願う。それがお金だ。分かるかい？」

「うん、分かるよ」

少年の声は震えていた。マスターはB砂糖をかき回し続けた。

「でも、公園にいる彼らがやり取りしているお金は、チェスへのご褒美なんかじゃない。単なる金だ。つまりチェスは金を稼ぐための道具に過ぎないんだ。なりふり構わず、手っ取り早く勝つ。それだけが彼らの目的であって、盤上に美しい何かを表現しようなどとはこれっぽっちも思っていない」

ポットの縁から食卓の上に、砂糖粒がパラパラとこぼれ落ちた。

「つまりだ」

マスターは人差し指にC砂糖粒を押し付けてなめ、それから視線を少年に移した。

「俺は坊やの駒を、そういう盤上で動かしてもらいたくないんだ。彼らの盤は結局、金を追求める欲に支配されている。それは相手のキングを倒したいという欲とは、全然種類が違うものなんだよ。いつか話しただろう？ チェスは二人で指すものだ、敵と自分、二人で奏でるものだって。だからいくら坊やの手が澄んでいたって、相手の音が濁っていたら台無しだ。そんなチェスをする坊やを俺は見たくない。坊やなら誰もがはっとしてI ようなチェスが指せる。盤上に、いや盤下に詩が刻める。それが俺にはよく分かっているから、だから賭けチェスなんか坊やには……」

「分かったよ」

我慢できずに少年はマスターの胸に飛び込んだ。

「もうしないよ。②あんなチェスは二度としない。ごめんなさい。マスターをがっかりさせるつもりなんてなかったのに、どうしてこんな馬鹿な真似をしてしまったのか……。ごめんなさい。本当にごめんなさい。僕はどうしようもない馬鹿だよ」

少年はマスターのシャツに顔を押し付け、③声を上げて泣いた。砂埃でざらざらしていたお札の感触を消そうとするように両手を握り締め、唇を無理矢理引き剥がされた時よりもっと大きな口を開けて泣いた。④ずっと胸を塞いでいたものが全部涙になって、後から後からこぼれ落ちてきた。

「坊やは馬鹿なんかじゃあるもんか」

マスターは少年の背中に両腕を回した。

「いや、違う。馬鹿だ。最低の馬鹿だ。せっかくマスターが教えてくれたチェスなのに……。よく考えもせず……。いい気になって……。せっかくの一等賞……。おばあちゃんがあんなに喜んでくれた一等賞を……。おばあちゃんに内緒で使うなんて……。しかも目茶苦茶なチェスで……。無理矢理酔っ払いからひったくるみたいにして……。ごめんなさい、マスター。ごめんなさい、おばあちゃん。ごめんなさい」

ひどくしゃくり上げ、言葉は途切れ途切れにしか出てこなかった。最後、ごめんなさいと言ったあと、少年は一段と激しく泣きじゃくり、涙と鼻水でマスターのシャツを濡らした。背中を撫でながら何度もマスターは、「いいんだよ。謝らなくてもいいんだよ」と繰り返したが、その口調の優しさがいつそう少年を悲しくさせ、涙をあふれさせた。

「で、お金は何に使ったんだい？」

小さな子供に話し掛けるように、マスターは少年の耳元に顔を寄せた。

「お子様……。ランチ……。デパートの……。弟と……。一緒……。」

「おお、そうか。それはよかった。弟も喜んだだろう？ よかった、よかった」

胸もわき腹も下腹も太ももも、マスターの身体は全部が柔らかく温かかった。少年が全身の力を預けても、何の苦もなくゆったりと受け止めるだけの余裕があった。少年は目を閉じた。その柔らかさと温もりの奥には果てがなかった。

⑤まるでチェスの海に沈んでいるみたいだ。

と、少年は思った。窓の向こうには夕闇が迫ろうとしていた。少年はいつまでもマスターと一緒にこうしていたいと願った。閉じた目からはまだ涙があふれていた。

あの日の夕方、なぜ自分はあるなにも泣いてしまったのだろうと、生涯少年は考え続けた。もしかすると自分は、何かを予感していたのかもしれない。あの日の夕方が、回送バスでマスターと一緒に過ごす最後の日になったのだから、自分の予感はずしかったのだ。自分は賭けチエスのことなんかで泣いたんじゃない、その予感に突き動かされて泣いたんだ。いや、逆だ。自分の予感がマスターの最期を引き寄せたのだとしたら？　自分が泣いたりなどしなければ、マスターがあんな目にあうこともなかったのだとしたら？　：：：そう思うとたまらなく恐ろしい気持ちに襲われ、息が止まるほど身体が震えた。

そんな時必ず彼は幻の声を聞いた。

「慌てるな、坊や」

その声はあまりにも温かく、II 浮かび上がってくるので、彼は思わずはっとし、あたりを見回さないではいられなかった。そして十一歳の坊やに戻り、あの時と同じように泣きじゃくってしまった。

（小川洋子『猫を抱いて象と泳ぐ』文春文庫）

《語注》

*1 チェス——西洋の将棋のこと。

*2 チェックメイト——チェスにおいて、相手のキングを王手詰めすること。将棋でいう「王手」のこと。

* 3 唇を無理矢理引き剥がされた時

——少年は生まれてくる時に唇がくっついて生まれ
てきた。その後、唇を離し、すねの皮膚を唇に
埋めたため、唇に産毛が生えているというコン
プレックスを抱えている。

問一

I、II にあてはまる言葉として、最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- I ア 後ろ髪を引かれる イ 面の皮が厚い ウ 歯に衣着せぬ エ 息をのむ
II ア ありありと イ ぼんやりと ウ じりじりと エ ひたすらに

問二

傍線部①「長いため息をついた」とありますが、このときのマスターの気持ちとして、最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 少年が賭けチェスをしてしまったことに対して失望は感じつつも、どのようにたしなめるのがよいのか悩んでいる。
イ 自分の指導の仕方とは違った行動をとる少年の様子を見て、自分と少年との考え方の違いを実感してしまい、どう接すればよいのか困り果て、弱り切っている。
ウ 賭けチェスをしなければならぬほど、少年にはお金が必要なのだと感じ、そういった環境に対して同情しつつ、どう言葉をかけようか悩んでいる。
エ 自分の教えを忠実に守り、賭けチェスで大人相手に勝ったことに驚き、これからどのような指導をすればよいのか思案にくれている。

問三

傍線部②「あんなチェス」とありますが、マスターが求めているチェスとはどのようなチェスですか。本文中の言葉を用いて、七十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部③「声を上げて泣いた」ときの少年の気持ちとして、最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア マスターの話してくれた思いが胸におちていくとともに、自分のしてしまったことの意味を知ったことで後悔の念を抱いた。

イ マスターに言われた理不尽な言い方に納得はいかなかったが、言い返すだけの表現が浮かばず混乱してしまった。

ウ マスターのチェスや少年に対する思いを聞き、それが責任として一身にのしかかったように重圧を感じてしまった。

エ 今までマスターから受けた指導の中で、一番厳しい物言いと態度であったため、腑に落ちるよりも先に恐怖を感じてしまった。

問五 傍線部④「ずっと胸を塞いでいたもの」とは何だと考えられますか。四十字以内で答えなさい。

問六 二重傍線部AとC「シュガーポット」「砂糖」「砂糖粒」とありますが、これらの表現がもたらす効果として、最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 少年に思いが届かなかったマスターの寂しさを表し、徐々に二人の心の距離が開いていくことを示している。

イ 話をすることに意識を集中しつつも、だんだんと話が核心へと触れていく様子を示している。

ウ マスターが憤りをこらえながらも真剣に話し、少年がマスターの話に徐々に納得していく様子を示している。

エ 何を話すのかを悩みながら話していて、その間も時間がどんどん経過している様子を示している。

問七

傍線部⑤「まるでチェスの海に沈んでいるみたい」とありますが、このときの少年の気持ちとして、最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 内緒で行った賭けチェスのことがばれてしまい、しぶしぶ事情をマスターに話したのに、それでも罪悪感が消えることがなかったが、マスターに謝罪を繰り返したことに、より、お互いの絆が強まったように感じ、穏やかな気持ちになった。

イ 自分がしたことに対して漠然とした違和感を抱いていたが、マスターと話しているうちに、その正体が何であるのかが判明し、解決の兆しを実感するとともに、マスターにも許してもらえたことでとても大きな安心感に包まれたように感じている。

ウ 賭けチェスをしたことの意味を理解し、反省を繰り返し、自己嫌悪に陥っていたが、そんな自分にもめげずに接してくれるマスターに対して感謝の気持ちを抱くとともに、改めてマスターの度量の深さに感嘆し、より尊敬の念を強めている。

エ 賭けチェスに対して強い罪悪感を抱いていたが、マスターと話をすることでその原因がはっきりするとともに、自分の中に湧き上がった後悔の気持ちをマスターが温かく受け止めてくれたため、深い安心感を抱くようになった。

〔三〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、丹後国に老尼ありけり。地蔵菩薩は暁ごとに歩き給ふといふ事をほのかに聞きて、暁ごとに地蔵見奉らんとて、ひと世界惑ひ歩くに、博打の打ちほうけてaみたるが見て、

「①尼君は寒きに何わざし給ふぞ」といへば、「地蔵菩薩の暁に歩き給ふなるに、あひ参らせんとて、かく歩くなり」といへば、「地蔵の歩かせ給ふ道は我こそ知りたれば、いざ給へ、あはせ参らせん」とAいへば、「あはれ、うれしき事かな。地蔵の歩かせ給はん所へ我を率ておはせよ」といへば、「我に②物を得させ給へ。やがて率て奉らん」といひければ、「この着たる衣奉らん」といへば、「いざ給へ」と隣なる所へ率て行く。

尼悦びて急ぎ行くに、その子にぢざうといふ童ありけるを、それが親をしりたりけるによりて、「ぢざうは」と

B問ひければ、親、「遊びに往ぬ。今来なん」といへば、「くはここなり。ぢざうのおはします所は」といへば、尼、うれしくて紬の衣を脱ぎて取らすれば、博打は急ぎて取りて往ぬ。

尼は「地蔵見奉らせん」とてゐたれば、親どもは心得ず、「などこの童を見んと思ふらん」と思ふ程に、十ばかりなる童の来たるを、「くは、ぢざう」とCいへば、尼、見るままに③是非も知らず臥し転びて拝み入りて、土にうつぶしたり。童楯を持って遊びけるままに来たりけるが、その楯してすさびのbやうに額をかけば、額より顔の上まで裂けぬ。裂けたる中よりえもいはずめでたき地蔵の御顔見え給ふ。尼拝み入りてうち見あげたれば、かくて立ち給へれば、涙を流して拝み入り参らせて、やがて極楽へ参りけり。

されば心にだにも深く念じつれば、仏も見え給ふなりけりと信ずべし。

(『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館)

《語注》

* 1 博打——賭博で暮らしているならず者。博打うち。

問一 波線部 a、b の言葉を、それぞれ現代仮名づかいに直し、全てひらがなで答えなさい。

問二 二重傍線部 A、C の主語（動作の主体）は誰ですか。次のうち、最も適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 老尼 イ 博打 ウ 親 エ ぢざう オ 仏

問三 傍線部①「尼君は寒きに何わざし給ふぞ」とありますが、尼君は何をしているのですか。本文中の言葉を用いて、三十字以内で説明しなさい。なお、答えは現代語を用いること。

問四 傍線部②「物」とありますが、老尼が博打に与えた「物」とは何ですか。本文中から三字で書きぬきなさい。

問五 傍線部③「是非も知らず」とはどういうことですか。具体的に二十字以内で説明しなさい。

問六 この文章の教訓はどのようなことですか。最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 願いを叶えるためには、悩むよりもまずは行動を起こすことが大切だということ。

イ 一心に信じる心さえあれば、願い続けていることはきつと叶うものだということ。

ウ 何事も深く信じ続ける気持ちがあれば、どんな困難にあっても乗り越えられるということ。

エ 何かを成し遂げようとするには、他人を信じ、頼ろうとする気持ちが大事だということ。

【四】 次の傍線部の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 会社の慰安旅行に参加する。
- ② 平穏な毎日を送りたいと願う。
- ③ チームの旗を掲げて応援する。
- ④ 伝染病の防疫対策を練る。
- ⑤ いずれこの土地の資源は枯渇するだろう。

【五】 次の傍線部のカタカナの言葉を漢字に直しなさい。

- ① 正式な売買ケイヤクを結んだ。
- ② 百人の従業員を新たにヤトウ。
- ③ 年をとって視力がオトロえた。
- ④ 幼い子にカンヨウな態度で接する。
- ⑤ 医学の進歩に多大なコウケンをする。

【問題は以上です。】

